

敷田 麻実

(5) 地域の視点を持つ「よそ者」として

今度は、この「よそ者」

題字は五木寛之氏

1998年春、15年間勤めた県を退職し、大学の仕事を移った。もともと、県

15年間同じ場所に勤めて、初めて変化を経験したが、「転する」ということは、ある意味では未知の世界へ足を入れることだ。そこ

思ふ。

15年間同じ場所に勤めて、初めて変化を経験したが、「転する」ということは、ある意味では未知の世界へ足を入れることだ。そこ

思ふ。

15年間同じ場所に勤めて、初めて変化を経験したが、「転する」ということは、ある意味では未知の世界へ足を入れることだ。そこ

思ふ。

15年間同じ場所に勤めて、初めて変化を経験したが、「転する」ということは、ある意味では未知の世界へ足を入れることだ。そこ

思ふ。

15年間同じ場所に勤めて、初めて変化を経験したが、「転する」ということは、ある意味では未知の世界へ足を入れることだ。そこ

思ふ。

15年間同じ場所に勤めて、初めて変化を経験したが、「転する」ということは、ある意味では未知の世界へ足を入れることだ。そこ

開放的な閉鎖性を

職員時代に自分の時間に研究していたことが仕事になつただけと言えばそれまでだし、沿岸域管理といふ分野は、水産の仕事とまったく異なる分野ではない。

しかし、県職員時代から今の仕事に変わって一番大

産業を通して海を見ていた。ある意味で、海は漁業生産を生み出す場所だと、産業に貢献する海の機能だ

ればまた、「よそ者」の気分だった。よそ者は、普通はよそから地域を訪れる旅の人であり、漂泊の民、ノマドとも呼ばれるが、私は

マドとも呼ぶべき、「よそ者」を招くにはどうしたらいいのではなく、海は海だけ切り離せばいい。海は海だから、その地域に「優れたよ

そ者の視点を持つ優れた人は石川にも多い。よそ者は必ず地域の外から来るわけではなく、私が「地域内よそ者」とよぶキーパーソンも多くいる。地域は、そのようなよそ者を許容できる余裕を持つことが大切だらう。

(金沢工業大教授)



海岸に漂着するべットボトルなどのゴミ問題に取り組み、国内外の研究者や活動家と連携を続けている=加賀市で

あるから、海であり得る。その視点を持てたのだから、私にとっては意味のある幸運な転職であったと思う。

ドン・キホーテのような「トリックスター」に思えるが、彼のほほんばかりではない。価値ある知識や知恵を持つ人もまた流れくる。地域の中でその人を生かすことができれば、そこに可能性が宿る。

実は、よそ者は「他者のまなざし」を持つ人で

が、多くのよそ者を惹きつける。実際、よそ者と協働するまわりくくりに長けていねむじゆめ、都市に近いとか、自由な風土があるとかではなく、開放的な閉鎖性を持つ地域が多い。

また、地域にいながら